

この紙のゴール：学期2回の実演を1枚に積んで、伸びをそのまま評価の材料にする

実演のたびに新しい紙を配ると、その回の出来しか残りません。同じ紙に積んでいくと、前回の自分が横に並びます。話すことの評価でいちばん見たいのは1回の出来ではなく、前より続くようになったかどうかです。

見るところ 6回とも同じ3つで見ます。回ごとに規準を変えません

見るところ	何を数えるか	観点
続いたか	相手の話に反応してから話し始めた回数。黙った時間が3秒を超えた回数	思判表
中身	理由を言えたか。具体を1つ足せたか	思判表
通じたか	聞き手が聞き返さずに分かったか（正確さではありません）	知技

話した語数は数えません。多く話した人が高い評価になると、生徒は暗記した文を並べ始めます。

1年の記録 実演のたびに1行ずつ。この紙は毎回持ってきます

回	時期	課題	続いた	中身	通じた	次の一手
1						
2						
3						
4						
5						
6						

3つの欄はA・B・Cで書きます。次の一手は自分で1つだけ―「もっとがんばる」ではなく、「相手の話に I see をつけてから話す」のように、次の回にやったかが分かる形で。

1年の終わりに

書くこと	自分のことば
いちばん変わったところ	
まだ変わっていないところ	
来年やること	

話すことの記録 | 回の置き方と、評価への使い方

6回の置き方 年間の評価計画と同じ数です（学期2回×3学期）

回	時期	課題の型	評価に入れるか
1	6月	やり取り（1分）・身近な話題	入れない（練習回）
2	7月	やり取り（1分）・意見を言う	入れる
3	10月	発表（90秒）・調べたことを伝える	入れない（練習回）
4	11月	やり取り（1分）・反論に答える	入れる
5	1月	発表（90秒）・意見と理由	入れる
6	2月	やり取り（1分）・1回目と同じ課題	入れる

6回目を1回目と同じ課題にしてあるのが、この紙のいちばんの仕掛けです。1年前の自分と同じ話題で話すので、伸びが本人にも教師にも一度で見えます。

評価への使い方

- ・思考・判断・表現は、評価に入れる回（2・4・5・6）の続いた・中身から取ります。練習回は材料にしません。
- ・主体的に学習に取り組む態度は、この紙の「次の一手」の列から取ります。書いた1手が、次の回の記録で実際に動いているか—動いていればA、書いてあるが変わっていなければB、書いていなければC。提出したかどうかでは出しません。
- ・回ごとの点数はつけません。A・B・Cで足りません。点にすると、生徒は0.5点の差の話を始めます。
- ・教師の記録は運営キットの記録シートに残し、この紙は生徒が持ちます。毎回集めて返すのではなく、実演の日に持ってこさせるほうが続きます（紛失した生徒には再発行し、教師の記録から前の行を書き写させます）。

伸びの読み方

記録の形	読み方
続いたが上がらない	話す型ではなく、聞く型が足りません。相槌と聞き返しの表現を5つだけ配ります
中身だけ低い	話すことの問題ではなく、書くほうで理由と具体を練習していない可能性。意見文の設計図と同じ型でそろえます
通じたが下がる	難しい表現に挑戦し始めた合図。下がったこと自体は悪くないので、評価では下げず、記録に一言残します
3つともCが続く	課題の話題が本人から遠い。身近な話題の回で1度A・Bが出るかを見てから判断します

つながる紙

1回ぶんの運営（進行台本・待機中の仕事・記録シート）はパフォーマンステストの2点に、6回をどこに置くかは年間の評価計画にあります。学期末に評価へ落とすときは学期の記録簿の思考・判断・表現の列へ、この紙のA・B・Cを移してください。

